



学校だより

# 「至誠」

防府市立松崎小学校

第13号

令和3年6月15日

## ＜かけがえのない「自己肯定感」を大切に育んでいきましょう！＞

国立青少年教育振興機構が、2018年に、米国、中国、韓国、日本の高校生を対象に行った意識調査があります。この中で、

「私は価値のある人間だと思う」

という質問に「YES」と答えた割合は、**日本の高校生は44.9%**でした。対して、米国は83.8%、中国は80.2%、韓国は83.7%といずれも高い数字が出ています。

日本人は自分のことは謙遜しますから割り引いて考えるにしても、「自分は価値がある」と自信をもって答えた高校生が44.9%というのは低い数字です。

一方で、こうした子どもたちに関わる、親、教師など大人も、社会が大きく変化しつつある今、先の見えない時代への「不安」を抱え、何を信じ、何を基準に、子どもたちを導いていけばよいのか迷い始めているかも知れません。そこで、今一度、目を向けたい言葉が、

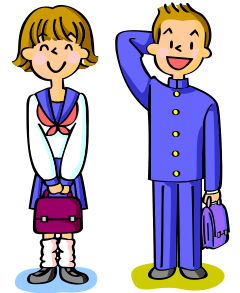
「自己肯定感」

です。自己肯定感の定義は様々ですが、この感情を支えているのは、「自分ができるという根拠のない自信」であると言う人がいます。「自分ができる」と信じている人は、困難に直面しても、チャレンジを繰り返し、成功体験を積み重ね、「**根拠のない自信**」を「**根拠のある自信**」に変えていくパワーをもっているように思います。これとは反対に、「根拠のない自信」が小さいと、「失敗するのではないか」という「不安」が目の前に大きく立ちはだかり、どうしても消極的になってしまうのではないのでしょうか。

一般的には、自己肯定感は、子どものあるがままの「個性」を受け入れ、尊重することで育ち始めると言われています。先のアンケートで高い「肯定」を示したアメリカの子育てでは、**子どもの「自信育て」を大切にしているそうです**。子どもの個性を尊重して自主性を育てる。子どもの小さな達成や成長を見逃さずにほめるなど、自信を引き出す子育てが実践されていると言われています。

また、近年、アメリカの子育てで注目されているのが「レジリエンス」です。誰でも一度や二度は大きな失敗や挫折を経験します。そのとき、子どもを救い出してくれる力が「**レジリエンス**」です。失敗や挫折など、強いストレスに直面した際の「回復力」「跳ね返す力」「折れない心」という意味で使われる言葉です。曲がってもすぐ戻る竹のようにしなやかな抵抗力であり、失敗や挫折をバネに成長していける力とも言えます。

これからの社会を生き抜くには、「チャレンジ精神」と「レジリエンス」の二つを兼ね備えていることが重要です。二つは共通する土台の上に成り立っています。それが「自己肯定感」です。生き抜く力を子どもに身に付けさせるためには、「自己肯定感」をどっしりと安定したものに育てることが何よりも重要です。自己肯定感が安定すると、その上に成立する「チャレンジ精神」と「レジリエンス」も強くなります。すると、さらに**その上に積み上げられる「勉強」「習い事」「人間関係」のすべてが、よりよく達成できるようになるのだ**と思います。



最後までお読みいただきありがとうございました。